

今月も想像力を刺激されるたくさんの作品との出会いがありました。

何かを落とした気がして  
振り向いた  
アスファルトに白く  
とまれ  
の文字

春町 美月（大阪府）

これまでもそこにあったはずの「とまれ」の道路標識が、今という瞬間の〈私〉と有機的に結びついている面白さ。なじみのある風景がいつもと違って見えてきます。進むことで失うものがあることを示唆している詩のようにも感じました。

流暢に言葉を紡ぐ  
ということについて  
ラップの端を探しながら  
考えている

春町 美月（大阪府）

くっついてしまった「ラップの端」ってなかなか見つからないものですね。あのもどかしさは確かに「言葉を紡ぐ」ことと重なる気がします。

珈琲をこぼした時に  
君の言う  
すごくきれいな川を見たんだ

青木雅（埼玉県）

束の間の幻視がとても印象的に描かれています。同じ作者による「高橋さん、／そっちには北極しかないよ」は、気軽な呼びかけと「北極」の組み合わせに、ご近所さんとの散歩がいきなり地球規模の広がりを見せたようでしたし、「先輩が日高屋のドアに挟まれて／ぼくらの星はまだまだ遠い」にいたっては宇宙規模。それぞれ別次元の世界につながる扉が開かれていて惹かれました。

マヨネーズを逆さに戻したって  
明日生きてないかもしれん

ヒロミヤカザル（京都府）

マヨネーズを逆さにするのは、次に使いやすくするため。でももしかしたら次はないかもしれない。生きるとはそういうこと。くだけた口調に、明日の不確かさが実感をともなうふいに心に湧きあがってきたことが伝わってきます。死に対して無力なわたしたち

ちの姿も。同じ作者の「地面と地面のあわいに／金平糖を食べるため／生きている」にも、人の生のはかなさを思いました。

8分前の僕と  
5分後の君なら  
きっと  
相性が良い

宇井 麻千（大阪府）

このようなすれ違いの書き方があるのかと印象に残りました。同じ作者の「僕なんかどうせ君の／好きな人ランキング／78492位だよね／／ネバーギブアップ」は、もうそれはランキング外なのではと突っ込みたくなるような大きな数、どちらもユーモラスかつせつない作品です。

わざわざ同じ店で買った  
ワイヤーハンガーの頭  
なぜか揃わない

桐口鈴汰（北海道）

取るに足らないと言えば取るに足らないことなのですが、こうして言葉で切り取られることで、このようなちいさな違和感は、人生に現れては消え現れては消えるものだと思います。ごくささいな実感からも詩的通路はひらかれます。

何かの黄色いジャム  
のままではいられずに  
檸檬と名乗り  
檸檬らしく振る舞う

春町美月（大阪府）

自己実現という言葉に呪いをかけられそうな現代、何ものかになることを常に要求されているかのような世の中への批評の詩と読みました。

今の僕は  
マトリョーシカの  
二番めくらい

佐々木佑輔（埼玉県）

まだまだ自分の核までたどりついてないということでしょうか。未来へ向かって生きることの楽しみにつながる詩だと思います。

人々人々人々人々人々人々人々人々

15針 全治10日

宇井 麻千（大阪府）

最初、なるほど人につけられた傷なのだと思ったのですが、「15針」の縫い目が「人」の字で表してあるということは、その傷を治すのも人との関わりなのでしょう。

空に森をみつけた夜に

両の手を器にして掲げる

満ちた水を呼ぶのだ

梁川 梨里（群馬県）

美しい祈りの儀式。繊細でありながらダイナミックな世界との接し方に惹かれました。同じ作者による「何処の誰でもない／たくさんの水の／息継ぎになる」も、水で満たされた人間の身体への独自のまなざしのようにもありますが、人間の枠組みを超えて、自然の循環の一部となるような広がりを感じました。

ひらがなにひらく

あなたのそばにいて

音無 早矢（北海道）

ひらがな表記による「ひらがなにひらく」という比喻に、「あなた」とのやわらかな時間がふくよかに伝わってきます。